
スノーガール

間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スノーガール

【Nコード】

N3951V

【作者名】

間

【あらすじ】

学校には？特別？と感じてしまう場所が多くあると思う。

暗く怪しい場所なのに落ち着きを感じたり。

日が当たっているのに関わらず何故か暗いとか思ったり。

大勢の人がいるのにどこか遠くの場所の様に思ったり。

そんな場所の中でわたしが選んだのは保健室だ。

室内をさ迷う薬品の匂い。教室とは異かなる静けさ。

普段入らない場所だけに特別と感じてしまうのかもしれない。

そんな保健室で落ちていた二人のお話

保健室の窓から外を見ると白い雪が地面を覆い、灰色の雲が空を包んでいた。灰色の雲から落ちてくる一つとして同じものが無い雪を暖房機で温まった室内でただ、見つめる。

視線を裏の校門の方に向けると黄色い帽子を被った公務員のおじさんと誰かもう一人居た。遠くからなので精細には伝えられないが多分、男子生徒だろう。なんせ、肌色の足が見えない。もしかしたら、ジャージを履いた女子生徒かも知れない。

ころころ変わる自分の意見に喝を入れて、意見を一つに統一させる。

あれは公務員さんに恋した女子生徒と言うことにしよう。だって、そっちの方が想像力を掻き立てられるし年の差の恋は何かと壁があるから燃える（こっちが）。これは間違いないと思う。カバンの中で教科書とイチャイチャしている体育着を賭けていい。

まあ、私の体育着なんて欲しがらる物好きは居ない……よな？ 少し不安になってきた。

頬を預けている腕のカーディガンが鼻に当たりちよくちよくとくすぐつたい。

黒色をした革のソファーに寄りかかり、同じ体勢でいるのにも疲れ始めてきたので横たわる。長さに足がはみ出してしまうので曲げる。冷たい部分が素肌に来て体に電流に似た刺激が伝わる。

ポケットに入れてある携帯を取り出して時間を確認する。三時二十二分。ホームルームが終わり、生徒たちが下校してから約十分程の時間が経っていた。

校内には、まだ多くの生徒が残っているだろう。部活に休みはない所為か保健室の廊下近くの階段から多くの駆け足の音が聞こえてくる。廊下、階段では走るなって教わらなかったのか。

先生は何を考えているのか。もし、保健室に寝ている人が居たらどうすると言っただろう。五月蠅くて眠れないだろうが。

「……あー、ねむ」

何も思わず口癖かの様に自然と出て言った。

……ツハ！ まさか寝ている人第一号が私になろうとしているとは。なんて、きたないんだ。しかし、眠い理由を思い出すと口元が緩みにやける。昨日、結構な時間電話したからなー。

思い出しにやけを口元に手を持ってきて隠して堪えてみるが無駄だった。

小さく欠伸をしてから適当に見ていた携帯電話を短くしているスカートのポケットに入れる。手をスカートの中身が見えない様に両手で覆う。横になっていると眠さが加速していくのが自分でよく分かる。

目を瞑るとファンヒーターからの唸り声に近い音が聞こえる。よく燃えている証拠である。

陸上部たちの足音が子守唄の様にも感じ始める。さすが睡魔さんだぜ。

ああ、人を待つのがこんなに長いと感じたのは久しぶりかも知れない。いつも、あいつが先に居てくれるから待つ必要が無かったから。

外は雪で天気も悪いから早めに帰ろうと思ったのに、そんな今日に限ってあいつは居なかった。

ちよつと、寂しい。つか寂しい。あいつが私にこんなにも影響を及ぼしていたとは……。

思いもよらないとはこの事だろう。胸の中で何度もあいつの名前を取り返し呼ぶ。あいつとの思い出が目には浮かぶ。寂しさ倍増。

「……ばーか」

一言小声で呟く。

誰も聞いてない。誰も聞いてない呟きは静穏の保健室で溶けて消えていく。乾く下唇をなめた。

外で雪の塊が落ちた音がした。体を一瞬震わせ、心臓の心拍数が急上昇する。無音に似た静けさの中に爆撃のような音がしたら普通人は驚くと思う。げんに私がそうだ。

心身を落ち着かせる為に深呼吸をする。すーすーはーはー。二度息を吸い二度息を吐いた。口内は乾燥している。歯磨きをした後に似た感覚がする。

あー、そろそろ眠さが限界。ファンヒーターからゆっくりと伝わってくる暖かみが心地よく眠さに滑車がかかる。

押さえている手から力が抜ける。顔を見られない様にせめて腕を枕にしてうつ伏せになる。荒れているカーデイガンが顔に当たり嫌になる。

あ、そうだ、帰る最中に店に寄って新しいカーデイガンの色をあいつに選んでもらおう。その後は喫茶店によって少し休んでからあいつの家に行って遊ぶ。うん、完璧。

意識が遠くに旅立とうとしている。体全体に入っていた力が抜けてふにゃふにゃな状態になっていく。何かに例えるならテレビの電源を消すと画面の中に消えていく線みたいな感覚。でも、激しい雨に打たれた後のスライムも、いいもかしくない。胸の中で神様をお願い事をする。少しでもいい夢が見れますようにと

「……あー」

目が覚める。白い天井がこちらを見ている。うつ伏せから仰向けに体勢は変わっていた。服はだらしく乱れていて腹が出ていた。

一度誰かがイタズラでもしたのかと思ってしまう。水分を無くした口内と喉はカラカラになっていて、声もかれているのが分かった。寝ぼけた頭で体を起こしながらYシャツとカーデイガン直す。

首を横に捻り音が鳴る。いい音が鳴ると気分が少し冴える。

乾いた喉は洗面台を求めて立ち上がる。立った瞬間、頭がクラツとして倒れそうになった。一步、また一步と靴下で床をお掃除しながら動かす。

洗面台の前に立ち蛇口を捻ると勢いよく水が流れ、銀の底を跳ねて私の服に水の雫が飛び移る。急いで弱めて流れを弱くする。ふう、寝起きの頭にはハードな動きだった。

ファンヒーターは今だ仕事をしてくれやがるおかげで保険室内はやや暑い。淀んだ空気が目の前を通った気がした。プラスチックのコップに水を入れて一気に飲む、飲む、飲む。

三杯目あたりから喉から大洪水しそうになる。まだ、入っている四杯目の水を洗面台に流して、コップを置いた。

空気が乾燥していて、鼻の頂点がかゆい。目は自然と外に向けた。空が灰色から黒色に変化を遂げているのに雪は退化も進化もしてなかった。止んでろよ、バーカ。

少し息苦しくなってきたので窓を開けて喚起を試みた。窓を少しだけ開けて凍えそうになるくらい寒い空気が開けた瞬間に顔を仰ぐ。しかし、火照っていた顔に冷たい風が当たり気持ちいい。ついでに、手を窓から出して雪に触ってみる。

「うわっ、冷めて！」

一口サイズの雪の塊を握っていると手の中で次第と無くなっていくのが分かる。雪は手の熱で融けていき、生暖かい水が手の平に広がる。

小学校の頃の話だけど、雪をカキ氷と勘違いしてイチゴシロップをかけて食べた思い出が今ごろになって蘇りやがった。忘れた記憶の一部で、黒歴史。

二十分に冷えてきた体が今度は寒さを訴えてきた。まったく、贅沢ボディーで困るぜ。

窓を閉める前に息を外に向かって吹きかける。すると、息は白く濁り降ってくる雪と合体しながら地面に落ちていった。テレビでや

つっていたが白く濁るのは空気が汚いからだっせ。私の息はきたなくねーよーだ。

気分もよく頭も冴え始めてきた。窓を閉めて鍵をかける。

「んっ……はあ……」

固まった体を縦に伸ばしながら、壁にかかつてあるアナログな時計に目をやると時間は六時を過ぎていた。……え、六時？

見間違いだろうともう一度、今度は目を凝らしながら近づくが結果は変わらず。六時。正確に伝えるなら六時三十七分。

時計の針が耳に響き脳に反響する。気分は沈み、言葉が出ない口は半開きになっていた。

冴えてしまった頭は呆然とする前に何か不吉な事を考え始めようとする。頭を横に振り、振り払おうとしてみるが無駄だった。

あいつは今どこにいるんだろうか？

あいつは今どこにいるのだろうか？

あいつは今なにを思っているのだろうか？

あいつは何故来なかったのだろうか？

様々な考えが頭の中を蹂躪していく。確かに約束も何もしていない。だが、これまで休日というのを除けば毎日ここで会って、話して、笑って、一緒に帰っていた。そうだ、約束も何もしていない。してないけど……私は毎日の様に来てくれると思ってた。

裏切りに似た気持ち胸の中をいっぱい満たしていく。奥歯を噛んで私は胸から零れ流れそうな何かを我慢する。

寒くもないのに背筋が震えた。爪が手のひらに刺さり痛い。息は苦しく吸うのも吐くのも辛い。力をなくした足は立つことが出来なくなり崩れる。

あの時の様な感覚が蘇り、鮮明に記憶が思い出される。一人ぼっちになった時の感覚、誰も構ってくれない。誰も分かってくれない。周りが全て敵に見えて、親切が嫌がらせに見えた。

違う、今は違う。あいつがいる。今はあいつがいる。私にはあいつがいる。……なら、何で今日はこなかったのだろう。

もしかして、私のことが嫌いになったとか……？

もしかして、私を忘れて他の女の子と一緒に帰ったとか……？

もしかして、私のことがどうでもよくなったとか……？

顎が振るえ、寒さと違う震えが体を包む。その場で体育座りになり自分の身を守る。ため息すらでない。また、一人。ファンヒーターがついていると言うのに体が冷めていく。

帰ったのなら、せめい連絡ぐらい入れて欲しかった。そうすれば私もまだ耐えれたかもしれない。……連絡？

急いでポケットに手をつ突っ込んで携帯を取り出すが急ぎすぎて落としてしまった。それをすばやくひろい上げる。二つ折りの携帯を広げると着信二件、メールが二件来ていた。

着信の相手は大神陽太おおがみひょうたからだ。時間は五時からのと六時から。私は急ぎながら続けてメールボックスを開ける。反応が少し遅いのがイライラさせる。

メールボックスに入っていたのは二件とも陽太からだ。最初に来ていた三時四十二分からのメールから見る。

『今から公務員のおじさんの手伝いするから、今日は一緒に帰れそうにないかも。ごめんね。』

最初に入っていたメール内容だ。続いて二件目のメールに移る。

『やっと終わったあ〜……。もしかして、今まだ学校に残ってる？

なら、一緒に帰らない？ 表校門で待ってるよ！』

届いた時間は四時十八分。？待ってるよ？の単語が頭の中で何回も、何回も並べられた。

今の時間は六時五十分。もうすぐ七時になるうとしていた。力が抜けていた足を奮い立たせてベットのの上に乗っけてある服とカバンを持って保健室を走って出た。

廊下に出た瞬間にひんやりとした空気が肌を刺激する。寒さの所為で足が思うように走ってくれない。一階から二階に上がるだけで息はずでに上がるうとしていた。元・陸上部が聞いて飽きれる。

暗い廊下は不気味に感じるが今はそんなことを気にしている場合

ではないのだ。時々、開いている教室のドアから中が見えてしまうのがよけい恐怖心を煽る。

暖まっていた足の指先は寒さを訴えるようにジンジンとしてくる。手先も冷えて、握り締めているカバンが腕を振るたびに手からこぼれ落ちそうになる。

最初は全速力で走っていたが次第に速度を失う。右肺の下辺りから痛みが押ししてくる。膝が笑い出しガクガクする。一步踏み出すたびに足から激痛が走る。しかし、それでも私は走るのをやめなかった。いや、やめれなかった。

あいつが待っている。待ってくれていると思うと足は自然と前に力強く踏み出していく。

学校玄関に繋がっている階段を今度は下りていく。三段抜かしとかがしていたら階段の角で滑り体勢が崩れる。体が壁にぶつかると大して痛くなかった。本当に運がいいかも。

無事に階段を下りて学校の玄関にやっと着いた。下駄箱から靴を投げる様に地面に強く置いて上履きを無造作に入れる。

靴をちゃんと履かずに踵を踏んで玄関のドアを押し開ける。学校内とは段違いの寒さが風を吹いて私に襲い掛かる。スカートが揺れるが押さえる暇もなく私はまた走る。

降り積もる雪の道が私の猛進を邪魔する。うぬぬ、これしきー！雪で足を取られて何度も転びそうになった。踵から雪が入り靴下に染み込んでくる。足の指先はすでに感触がない。応答不能なのに走行続行中。

表校門に近づくと白い雪と暗い夜空には不似合いな紫色をした傘が見えた。やっと付いたと思ったなら走っている足が急に止まった。勢いよく顔から雪に飛び込んでしまった。ああ、いてえ。

体の疲労は限界値を超えていた。肌をさらしている部分が雪と接触して体の体温を下げていく。ああ、もう少しなのに。どうでもいいがRPGの死んだ時に流れる文章が見えた気がした。おお、ゆうしゃよ しんでしまうとは なさけない。

「咲夜……ちゃん？」

陽太の声がある。頭に降ってくる雪がいきなり止んで周りが少し暗くなった。返事をしたいが言葉が出ない。此処まで重症だとは。テレパシーでもあれば便利なのにな、と非現実的な考えをしてしまつ。

「はあ……ゲホツゲホ……はあ……」

「はわわ！ えっと、えっと……どうしようどうしよう……」

慌てている陽太の声がある。ははは、そろそろ休憩は終わりだ。これ以上、お前を困らせる訳にはいかないよな。

カバンと荷物から手を離して腕立ての状態から体を起こす。よし、次は足だ。体育座りの体勢になって膝に力を入れて立ち上がるが途中でガクツと強烈な痛みが右膝を襲い崩れる。

ハハハ、陽太の目の前だつて言うのに情けないしかっこ悪い。陽太に跪く形になっている、顔を上に向けて苦笑いを浮かべる。

「……咲夜ちゃん、少しだけ我慢してね」

陽太は持っている傘とカバンを地面に置いて私に近づく。雪が潰れる音が聞こえる。

左手は膝に通して右手で私の背中を支えて「よいしょ」と言いながら抱きかかえた。背中に陽太の手があるとと思うと非常に安心する。つか、こ、この体勢と言うか抱え方は夢みる乙女の憧れのお姫様抱っことか言うのではないでしょうか？ こ、こやつ中々やるではないか……じゃなくて離せー！

整らない息、止まらない咳、痛み出す肺。体全身が痛い。明日は筋肉痛コース決定だな。

「あ、案外……ゲホツ……力あるんだな……」

「咲夜ちゃんが軽いだけだよ」

私より一回りぐらい小さい癖に生意気だー、とか思ったけどこいつも男なんだよな。なんて、思っていると冷えている顔が火照りだす。あー、今日の私はだめだ。

下に俯き前髪とその影で顔を隠す、が多分バレていると思う。

だって、髪の間隙から見える陽太は笑っていたからだ。

笑う陽太はなんか……反則だ。私の中に入ってきてきてもちやくちやに荒らしてくる。そして、出て行くとは私の中が痛むんだ。まった……酷いよ。

場所は座れて屋根があつて風を通さない学校の下駄箱に移った。

「立てる？」

「お、うん……立てるよ」

ゆっくりと地に足を着ける。触れていた肌が徐々に冷たくなっていく。腰を下ろして素材がよく分からないなんか高そうな石の上にスカートを直しつつ座る。どうでもいいけど、こいつ玄関を開ける時に足つかつたぞ、おい。なんだか、ちょっとワイルドだったけどお行儀が悪いので後で注意しとこう。

「置いてきた荷物取ってくるから、ちょっと待っててね」

「うん……悪いね」

「気にしないでくれると……僕は嬉しいかな」

微笑みながらガラスのドアから出て行った。

うつつ、ドキツとした。ドキツとした！ きつと、誰にでも微笑んでいるに違いない。あ、やっぱり今の無しで。自分で言つといて痛くなつたから無しで。

誰も居ないのに手を振ったりして否定する。やった後に気づくこの空しい思い。

「にしても、寒い。風邪引くな……こりゃあ」

何か着替えたいけど何か無いかな……あ、そうだ体育着に着替えればいいよね。で、上にダッフルを着れば完璧。私って天才。とか思った矢先、頭を抱えた

着替えるって何処だよ！ 此処でか？ 此処は無理だ。ガラスのドアがある。なら、保健室か？ 戻る間に先生に見つかったら説教コースだ。この時間に誰かが学校に残つてると知られたら……考えるだけで恐ろしい。

じゃあ、どうする？ 此処の下駄箱の陰に隠れるか？ ……それ

しか、無いようだ。私の選択肢に着替えないと言うのは無い。早くあいつが帰ってこないかな。カバンの中に体育着が入っているため、あいつが帰ってこない事には着替える事が出来ない。

「って、陽太がいるじゃん！」

「うん。いるよ？」

後ろからの声に身を震わせ、振り返る。片手には私のバックとダブルコートが。どうぞ、言わんばかりに突き出してる両手。持っている荷物を取ってから感謝の言葉を一つ述べる

「ありがとな」

「どういたしまして」

また、黄金の様な笑顔が私を照らす。うおっ、まぶし。今ちよつとだけ後ろに太陽が見えた気が……。目を凝らしていると不思議そうに顔を近づけてきた。

ち、近い。鼻息がかかる程近くなると私は凍る。機能していた鼻と口を停止させて息をとめる。

「えいつ」

「うわっ！」

冷たい、本当に冷たい手がいきなり両頬を包んだ。陽太は頬を膨らまして怒っているようだった。笑っていた顔から怒る顔に変わるのが早い。こいつは怪人十二面相か。つか、人の顔の表現に十二個もあるかな？ 怒る顔、泣き顔、笑顔、どや顔、悲しい顔、嬉しい顔……これ以上、浮かばないあたり私の国語力が知れている。

でも、本当に何で怒っているのか分からない。私悪い事したつ……しましたね。私は悪い事をしましたね。忘れていた事を思い出す。一番忘れてはいけない事を思い出した私は頬を包んでいる両手を握って立ち上がる。

「よ、陽太！ その、今日はごめん。本当にごめんなさ……い」

「え？ あ、うん。別にそこまで謝らなくなつていいよ。今度から気をつけてくれれば」

「でも！ でもよ！ それだけじゃ、私の気持ちガスッキリしない

「つーか、こうモヤモヤするんだよ！」

胸元に陽太の両手をくっ付けて表現する。私は俯きその両手を見ていた

「そうだ。私のあんな長い間を一人寒い外で陽太を待たせた。裏切られたとも思ってしまった私。あの時の感情が恥ずかしくて、あんな事を思った恥ずかしくて、自然と涙が出てきた。」

「さ、咲夜ちゃん?!」

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんな……さい……ごめんな……さい」

次第と言葉は途切れて良く、泣いている場合ではない。泣きたいのは私ではなく陽太の方かも知れない。けど、胸の器から溢れた? それ? は涙となって流れていく。それを止める事は今の自分では出来なかった。

「……」

私の言葉と泣き声だけが響く。

何を思ったか陽太は私が掴んでいる両手を外して一回り小さい体で私を抱きしめる。その両手は優しく、温かく、安心する。

「咲夜ちゃんは優しいね」

「ぞんな……ごどない」

私が優しいはずがない。私が優しくしたらあんな陽太が裏切ったとか思わない。嫌な事も思わない。私を忘れて他の女の子と一緒に帰るとか、私のことなんかどうでもよくなっただとか思わない。

「優しいよ。……だってこんなにも僕の事を思って泣いてくれてるじゃない」

「それは」

「僕は咲夜ちゃんが大好き。この世界で誰よりも大好きで大切な人言葉が出ない。」

何を言ったらいいのかわからない。何を返したらいいのだろう。

陽太から弾ける程の胸の鼓動が制服越しから振動してくるのが分かる。胸の器から溢れていた? それ? は止まり、今度は別のモノが

流れ器の中に流れ込んでくる。

その？モノ？が何なのか分かる前に私の体は先に動いた。気づいたら涙は止まり、顔には笑顔が灯る。

「え、ちょ、さ、咲夜ちゃ……んっ！」

「……」

私は何も考えずに陽太を押し倒してキスをした。押し倒した時の怪我や相手の感情など無視して。自分勝手な感情を押し付ける様に触れる唇が動く。

陽太の唇は男の癖に潤っていた。私の唇とは正反対で柔らかく、気持ちいい。

私を大好きと言ってくれた陽太が愛おしい。愛おしすぎて心が融けそう。私はその気持ちに答えたくて、キスをした。

そんな私を陽太はどう思うだろう？ 軽蔑するかな？ 引いちゃうかな？ 唇を離すとふとそんな事を考えてしまった。けど、それをすぐにかき消してくれた。

「咲夜ちゃん……」

陽太の甘い声と嬉しそうなヒマワリのような笑顔が私の頭の中をめちゃくちゃにしてくれたからだ。

めちゃくちゃにされた脳内は陽太成分で満たされていく。考えることが全て陽太の事になる。

「私も……好きだ。大好きだぜ？ 大好きなんだぜ」

「そんな、まっすぐ、見つめられながら言われると、その……うっ……」

陽太の顔がみるみると赤くなっていく。目も耳も赤い。照れんなって言いたいけど、実は凄く私も恥ずかしかったりする。だから、言葉が変になっているのはご愛嬌って事でご勘弁を。

馬乗りの体勢から離れる。これ以上、見つめているとこっちも照れる。スカートの中が見えない様に左手で押さえながら右手で陽太に手を貸す。

躊躇う様子もなく手を借りて立ち上がる。お尻や背中を叩くのを

手伝う。少しゴミがついていた程度でよかった。立つ時に痛そうな顔もしてなかったから多分だけと怪我はないかな。

体育着に着替えて帰ろうかと思っただけと体が思いのほか凄く温かい、つか暑いからこのまま帰ってもいいかもしれない。実際問題、着替えるのってめんどくさい。

灰色のダツフルに腕を通し、前のボタンを閉める。カーディガンのポケットに携帯が入っているのを思い出してあちゃーと後悔するが近くにこいつが居るからいいや。

唇を触り、さっきの感覚を思い出す。ここだけ空間が隔離されて二人だけの世界に入りきってる様な感覚。二人の間に時間など存在しなく、ただゆっくりと過ぎていくだけ。そんな感じだった気がする。

「ねえ、笑ってどうしたの？」

「え？ いや、何でもないぜ。これはただの思い出し幸せだから」

「そっか。なら、僕も今思い出し幸せしてるね」

「そっか」

「うん」

私たちは指を絡めて握り締めた。陽太の手は冷たくて私の手の温かさ飽和して気持ちいい。カバンを左手にもって私たちは学校玄関を出た。

外の雪は少し弱まってはいるが地面の表面に積もる雪が凄かった。陽太の傘の中に一緒に入って表玄関から出て行く。

二人の歩くテンポはズレてるが咲夜が前に出たら陽太が小走りですぐ並ぶ。今度は陽太が前に出たら咲夜が手を引っ張って一緒に並ばせる。

枯れた梅ノ並木を歩く。しかし、雪がその梅ノ木の葉の変わりになって降り注ぐ。ってのは少し無茶があるかな。

(後書き)

私の処女作を読んで下さりありがとうございます。

可愛い男を思い描きながら書いたらこんな風になってしまいました。
まだまだ未熟ですが、これからより良い作品を創り上げていきたい
と思います。

それでは、また別の作品で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3951v/>

スノーガール

2011年10月9日13時45分発行